「メルロポンティ」【1908 ～ 1961】

フランスの哲学者。後期フッサールの現象学に強い影響を受け、人間的主体としての身体をありのままに記述する独自の現象学を展開した。著「行動の構造」「知覚の現象学」「シーニュ」など。

哲学体系は「両義性（ Ambiguïté ）の哲学」「身体性の哲学」「知覚の優位性の哲学」と呼ばれ、従来対立するものとみなされてきた概念の＜自己の概念＞と＜対象の概念＞を、知覚における認識の生成にまで掘り下げた指摘をしている。

たとえば、それまで枯れ木を見たことがない人にとっては、枯れ木を見るだけでは、名前のない枯れ木を「現象」としてしか知ることができない。「枯れ木」を恒常的に認識できるようになるためには、「枯れ木」という言葉（記号）を知る必要がある。

また、精神と身体というデカルト以来の対立も、知覚の次元に掘り下げて指摘し、私の身体が＜対象になるか＞＜自己自身になるか＞は、「どちらかであるとはいえない。つまり、両義的である」とした。一つの対象認識に＜精神の中のものであるか＞＜対象の中のものであるか＞という二極対立を超え、私の身体のリアリティは＜どちらともいえない＞。しかし、それは無自覚な＜曖昧性＞のうちにあるのではなく、明確に表現された時に＜両義性＞を持つとした。そして、その状態が＜私という世界認識＞＜根源的な世界認識＞であるとした。

可逆性（ reversibilite ）
手袋を裏返すと、指先の何もなかった空間に裏返された手袋が存在する。つまり手袋の意味は、手袋の表裏が密着した折り返し点に生成している。あらゆる物事は、内と外が接し織りなす、リヴァーシブルな「襞（ひだ）」にしか存在しないのだ――。これがメルロ＝ポンティの「可逆性」である。意識でも物体でもない存在として人間をとらえる「両義性」の思考を、両者の相互交流という視点から深めることで到達したこの考え方により、存在論のあらたな地平は切り拓かれた。そして哲学的反省は閉じた系として完結することを禁じられ、現象学のアクチュアリティは無限に拡大する。